



现代汉日辞海

上

A—LUO

〔日〕大东文化大学中国语大辞典编纂室 编

北京大学出版社



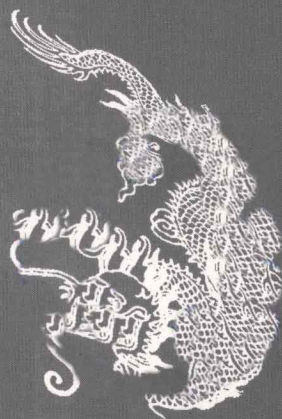
· XIANDAI HANRI CIHAI ·

现代汉日辞海

上

A—LUO

〔日〕大东文化大学中国语大辞典编纂室 编



北京大学出版社



刊行にあたって

私が、時代性と地域性を配慮した中国語辞典が必要であると、漠然とではあるが、考えるようになったのは、1960年頃であった。

1981年、大東文化学園は、その翌年大東文化大学創立60周年を迎えるにあたって、記念事業を行うことを決定した。その一つとして「中国語大辞典」を編纂・公刊する企画が浮上、私がその編纂責任者として推された。私は60年代初期から脳裏に画いていた構想を書面にまとめ機関に提出、機関決定を経て編纂準備に着手した。しかし、これまで時代性と地域性を同時に配慮した中国語の辞典はなく、まさに暗中模索の境を徘徊する思いであったが、とにかく資料の収集を先行させることにし、日本側はもちろん、中国側の関係者にも協力をお願いした。幸い日本側の協力者からは比較的短期間に承諾を得たが、中国側の関係者の同意・協力を得るには、相当な労力と時間を費やさねばならなかった。

私は、1945～1960年の約15年を除いて、しばしば中国を訪れており、中国人と知り合いになる機会が多く、いつの間にか、親友とはならないまでも、仕事上の相談ならできる関係の人が何人かできていた。その中には出版社関係の方も少なくなく、この方たちを通じ、中国には、ある時代の、ある作品の、ある地域の語彙について、調査・研究、釈義を施し、すでに定稿あるいは草稿の段階で、ただ公刊の機会に恵まれず、徒らに篋底に秘したままになっているものが、少なからずあることを知っていた。

私は自ら中国へ赴き、南は広州から北はハルビンまで足を延ばし、直接その方たちに面会し、辞典編纂の目的・構想を説明、資料としての提供を懇請した。その結果、北京・上海をはじめ各地の研究者20数名の方が快諾され、予想していたより早く、また大部の資料が編纂室に寄せられ、それと前後して、日本側の協力者の資料もおおむね出そろった。

私は、これらの資料を検討、年来の構想をどう具体化するかを考慮、若干の試行錯誤を犯しながらも、1年有半の間に、次のような方針を立てることができた。

- (1)語彙の処理には、民国以降の、とくに解放後の研究成果を取り入れる。
- (2)虚詞（機能語）の取扱いは、日本人が使用する辞典である点を重視し、とくに記述を平易・詳細にする。
- (3)語彙の範囲を広くとり、普通語（漢民族共通語）の語彙は言うまでもなく、方言語彙、専門語彙、書面語、旧語、新語、俗語、成語、熟語から、現代語になお使用される古典語に及ぶ。
- (4)旧白話語彙は、主として宋代以降の文学言語に見られるものを採り、とくに現代語に継承されているものは、排列に語彙史を語らせるよう工夫する。
- (5)煩を厭わず、用例を多くし、読む辞典としての性格も強く出す。

以上のような方針で、この辞典の編纂は始められたのであるが完成までには紆余曲折があった。

大東文化大学設立60周年記念事業の一つとして、中国語大辞典編纂の案を提起されたのは鈴木則幸氏を理事長としていた執行部であるが、その後執行部の交替があり、代わって理事長の職に就かれた大西経信氏が正式に具体化に取り組んだ。大西氏は氏独特の教育哲学をもち、大学は無体財産をもつべきであると常に主張されていた。その一つとして60周年を機に具体化を計られたように私は受け止めている。当時、大西理事長を補佐していたのは河上昇之助常務理事であるが、同氏は大西氏の提案に賛成され、周到な準備の下に、その事務処理を60周年記念事業室長、現在常務理事を務めている渡辺功一氏に委ねた。河上氏は辞典の編纂には長い歳月を必要とすることを考慮、完成までの間に起こるであろうあらゆる場合を想定、編纂委員会と編纂事務室の権限を分離運営するようにされた。この組織のおかげで、後日執行部の交替などがあったが、大きな影響を受けることなく、私たちはひたすら編纂に力を注ぐことができたのである。しかし中国の人はよく「夜長ければ夢多し」と言う。歳月が長くなれば、その間に欲しない夢も見なければならぬ。そのような夢もたしかにあったが、幸い一過性のもののようによろこび消え去った。これは学園の安定的発展に尽瘁されている鈴木武夫理事長、田村房夫常務理事が構成する現執行部の理解と配慮、ならびに佐藤邦宏室長の忍耐強い、誠実な、献身的な協力に負うところが大きい。

私は編纂の仕事の終点がようやく見えるようになってから、気持ちに余裕のようなものが生まれたからか、上記の方々、および事務職員の方に正式に感謝の意を伝えるのを忘れていたことに気がついた。ここにこの序文の場を借りて、改めて心からなる感謝の意を表しておきたい。

直接編纂の仕事を進める編纂委員会と、編纂上の事務を処理する編纂室は車の両輪の関係にある。両輪は常に一定の、同じリズムでの回転が保証されなければならない。ただ編纂委員会という輪の回転は、私一人の力ではいかんともし難い。当然多くの方にその原動力を求めなければならない。この力を与えていただいた方は、別に掲げるように、たいへんな数にのぼる。ここで何人かの方をその代表として紹介させていただくのも、委員長としての私の務めであろう。

学園側はこの仕事に大東文化大学外国語学部中国語学科の教員の全面的な協力を期待していたことは明らかであり、中国語学科は他の学部・学科に先駆けて中国の大学と提携関係をもち、また教員交換派遣のほか、特定の大学・研究所に限定せず、専門研究者を招き交流を行い、相当な実績をあげてきた。この辞典編纂が上掲の方針を貫くには、この方たちの協力も仰がなければならない。学園執行部は、中国語学科はこの辞典編纂の完成に必要な条件を具えていると判断されたに違いない。この期待に平松圭子教授他数名の方は、編纂着手時から付録の作成に至るまで、教育・研究・校務多忙の中を、貴重な時間を割き、無償で応えてくれた。また、提携校である北京外国語学院から派遣された客員教授の方にも本学の教員とともに尽力していただいた。客員教授の中には、何建章、楊天戈先生のように中国でも一家をなしている方も含まれ、編纂協力を通じ、若い編纂者を指導する立場にも立たれ、本学における外国との学术交流の好ましい前例を啓いていただいた。

他にも大東文化大学関係者の中からは、故井上隆一名誉教授をあげなければならない。井上先生も編纂開始の時から、定年退職されてからも「知るということは知らないことを知ることである」という態度を堅持され、若い教員、若い編纂協力者に無言の範を垂れられた。私は校正の折、先生が親しく筆を執られた釈義や訳文に接するたびに、胸にこみあげてくるものを覚えた。先生はこの辞典の公刊を待たず他界されたが、この辞典は先生の遺徳を偲ぶ貴重なものとして残るであろう。

研究者には研究成果を後の人のための役に立つよう、何らかの形で残しておくことが望まれている。宮田一郎先生は、ご本人の意思はどうであろうと、客観的にはこれを辞典という形の中で残された。先生は大阪市立大学を退職されると、大東文化大学の要請を受け、単身赴任、不自由な生活を送られながら、私のたつての希望を容れ、長い間の蓄積を傾けられ、虚詞の部分を担当されただけでなく、日本においての呉語研究の第一人者としての深い造詣を剩すところなく傾けられた。この辞典が虚詞の説明、方言語彙の扱いに際立っているのは先生に負うところが大きい。

この辞典全体の校閲の仕事を担当していただいたのは閻崇璩先生である。先生は若くして胡適の薫陶を受け、古今の言に通じ、しかも豊富な学識、正確堅実な釈義は到底私たちの及ぶところではない。会う人すべてに中国の伝統的な知識人の風格を感じさせる学者で、北京外国語学院中文系の教授の任に就いておられたが、私のたつての懇請を容れ渡日、爾来十数年、一貫してこの辞典編纂の中心的存在として、いささかも倦むところなく、貴重な老後の時間を校閲の仕事に費やされた。先生なくしては、この辞典の公刊は望むべくもなかったであろう。ここに編纂委員会委員ならびに関係者に代わり、先生のご苦勞に対し満腔の謝意を表しておきたい。

私たちは以上のような組織と協力者によって仕事を推進してきたのであるが、この推進のかくれた力となったものに、角川書店の辞典編纂に対する伝統的な考え方・理解があったことも書き加えておかなければならない。

この辞典は大東文化学園、編纂室・編纂委員会、角川書店の三者が、それぞれの立場で、最大限の努力を払い公刊まで漕ぎ着けたものであり、表面に顔を出している私個人や協力者だけの力だけによったものではない。ともあれ、私たちの努力によって、これまでの中国語辞典とは異なる、新しい方針に基づく構想がどの程度具体化されているか、私自身なおいくばくかの不安も感じているが、もし使用者から相応の評価が与えられるならば、大東文化大学創立60周年記念としての大きな企画の実現に私が負った責任の一端を果たしたことになるであろう。

大東文化大学中国語大辞典編纂室

編集主幹 香 坂 順 一

1993・11・18 北京で

凡 例

1 この辞典の構成

- 1) 刊行にあたって
- 2) 凡例
- 3) 索引
- 4) 本文
- 5) 付録
 - I 度量衡一覧表
 - II 中国の親族呼称
 - III 中国少数民族表
 - IV 節気表
 - V 名詞量詞組合せ一覧
 - VI 新訂正音表
 - VII 化学元素表
 - VIII 簡体字表（日中字形対照表）
 - IX 漢字偏旁名称表

2 親文字・語彙を検出する方法

1) 親文字の検出について

親文字の発音を中国式表音字母（‘拼音字母’）によって知っている場合には、直接本文によって検出する。

親文字の発音がわからない場合には部首索引を利用する。

部首索引は偏旁双方から検索しうる方法を取っている。

2) 語彙の検出について

語彙の検出には次の点に注意されたい。

- ① 単音節語（漢字一字の語）の場合で、それに品詞名があるものは、一単語として用いられるものである。
- ② 見出し語（凡化のもの以外は二音節以上の語）は原則として一単語あるいは熟語（慣用語）・成語・諺などであるが、連語も収めている。それは連語でありながら他の語を構成したり、あるいは熟語（慣用語）・成語・諺・歇後語などの冒頭に用いられているからである。
- ③ 親文字について、ただちに〔 〕の中に二音節語を示したものは、この親文字がもつばらそのような複音単純語を作るのに用いられるか、あるいは複音節語でも、ただその語にしか用いられないものである。
- ④ 見出し語は②で述べたように、原則として文中

で一つの最小単位として働きのものであるが、特に単語の認定をきびしく行い、連語との別を明らかにした結果、漫然と検出しようとしても検出できないものが少なくないかも知れない。そのような場合には、一つ一つ親文字にあたり、それが独立するものなのかどうかを確かめる必要もあろう。

- ⑤ 動詞と補語から成っているものについては、結び付きの頻度の高いものは、一語として取り扱っている。

- ⑥ 動詞や形容詞の後につく方向動詞は、この辞典では接辞として処理しているもので、常用されるものについては語彙としてあげてある。しかし、接辞としても一語をあて、次のような処理をしている。例えば、

一起来 一不了 一得了 一下去

利用者はこの接辞の説明によって、統一的に意味・機能を理解できるはずである。

- ⑦ 「動詞＋客語」の構成をとっている単語はよく分離される。いわゆる離合動詞をつくっているのであるが、これには離合の幅に違いがあり、擬似単語のものが少なくない。これをどう処理するかは、議論の分かれるところであるが、この辞典ではその幅をやや狭くとり、比較的恒常的に結びつくものについては一語として収めた。動詞および客語になっているものが一語か否かも、単語と連語とを分ける手がかりとした。

- ⑧ 「修飾語＋被修飾語」の構成をとっているものの中、特に「単音形容詞＋単音名詞」のもので、恒常的に結び一語となっているもの（例えば‘好人’‘好天儿’）は一語と認定したが、二音節形容詞のものは‘的’を介さないものだけを一語と認定している。「形容詞＋動詞」のものでは、「動詞、形容詞」とともに単音節のものは原則として一語と認定した。

- ⑨ 親文字のところでくゝで挙げた複合語は、本来親文字の意味を説明するための補助的なものであるが、それだけの訳語で十分なものは、語彙のところでは説明を省き、親文字のところを参照するように指示しておいた。

- ⑩ 同一の語がいくつかの表記法をとる場合には、品詞名の前に「＝」でそれを示しておいた。また、三音節語としても二音節語としても同じ意味・働きをもつものについても「＝」で示した。

- ⑪ 同一の形をとっているながら発音・意味を異にするものについては、相互に参照すべき指示をして

おいた。

- ⑫ 一つの単語から派生する語については、原則として、それを独立して語彙の項に立てず、その単語内部で処理した。例えば‘火柴頭’‘火力网’などは、独立して一項をたてておらずそれぞれ‘火柴’‘火力’の中で処理されている。
- ⑬ やや恒常的な結び付きをなす連語についても、前項と同様に処理してある。‘火车司机’‘火车机车’などは一項をもたない。ともに‘火车’内部で処理されている。
- ⑭ 成語・熟語（慣用語）の場合も前二音節以上の部分が一語としての資格をもっているものも、やはり多くその内部で処理してある。例えば‘狼狽为奸’‘要价（ル）还价（ル）’などは、それぞれ成語・熟語（慣用語）とみられるが、一つの項をもたず、‘狼狽’‘要价（ル）’のところで処理されている。
- ⑮ 「重ね方式＝変化方式」によって作られる語は、特殊なものを除き語彙として立てておらず、原形の語によってその意味をとるようにしてある。原形の語には、それが「重ね方式＝変化方式」をもつかどうかを（疊）・《疊》で示してある。

3 親文字について

- 1) 本辞典には親文字の項に繁体字（旧字体）・俗字・異体字を併記してある。特に俗字を収めたのは、活字ではあまり見られないものでも、現在の中国の社会では、筆写したもの、手紙や広告・掲示などにしばしば用いられているからである。
- 2) 親文字の排列は、中国式表音文字（‘拼音字母’）によるアルファベット順に従い、各音節のはじめにはアルファベットとともに、注音字母も示した。
- 3) 同音の字は、第1声→第4声、軽声の順にし、声符を同じくするものをなるべくつづけて排列するようにした。
- 4) 正字と他の文字との関係はつぎのように示した。

〔里〕（裏、裡）（ ）のは繁体・異体字

〔钩〕（鈎、勾）（ ）*のは俗字

- 5) 親文字で発音が幾つかあるものについては、それぞれの発音の項に排列、㊦㊧㊨…の符号で、他にも親文字として立っていることを示すとともに、親文字説明の後に別な発音を表示することによって、参照の便を図るようにした。
- 6) 意味が同じで、いくつかの発音のある場合、特に別項を立てる必要がないと思われるものについては、又音を示すにとどめた。例えば、

啥 shà（又）shá

干净 gānjìng（又）gānjīng

- 7) 意味・働きがわかれているものについては、①②③…でそれを分け、独立した単語として用いられるものについては、品詞名を付した。したがって、品詞名のないものは、現代語では単語として用いられないことを示す。また、㊦、㊧などとともに品詞名が示されるものは、方言や旧白話において、独立した単語として用いられることを示す。
- 8) 地名や河川名、民族名、王朝名など、また学術用語などは、単音の語で用いる場合は少ないが、固有名詞・専門名詞として処理した。
- 9) 正字の後に（ ）で旧字体や俗字を示したものは、旧字体・俗字が、その正字の一部の意味・働きしか含んでいないものがあるので、（ ）の文字に①②…を付し、その文字の意味・働きの相当する部分を示した。例えば、

〔尝〕（嘗、①嚐）①味わう。味をみる。②体験する。経験する。③〔副〕かつて。＝‘曾经’

このような場合、‘嚐’の意味は、①に限定される。

- 10) 親文字で接尾辞‘～ル’‘～子’‘～頭’をとるものは、（～ル）（～子）（～頭）または（～ル・子）（～子・ル）（～ル・頭）（～子・頭）のように親文字を省略して示した。なお、これらに「*」印のついたものは、語彙としても一項を立て他の意味や関連したことより詳しい記述があることを示しているのので、語彙の項も参照されたい。
- 11) 親文字の説明中、㊦・㊧という符号を使っているところがある。㊦は転義あるいは比喩で以下のようなことを示す。㊧も同じであるが、基本義の説明のため例文や例語が入りこんでいる場合、それらを越して、前の説明と結び付くことを示している。
- 12) 以上のほか、親文字説明の中で用いられている符号については、別掲の「符号・略語表」によって承知されたい。

4 語彙について

- 1) 本辞典に収録されている語彙、及び派生語・関連語には、現代中国語の普通語語彙、方言、旧白話語彙、書面語（文言語）、および専門用語、成語（成語形式のものを含む）、熟語（慣用語）、俗語などを含む。これらはそれぞれ略語で区別がしである。
- 2) 語彙の発音は中国式表音文字（‘拼音字母’）で

示し、語彙の配列も原則として同上のアルファベット順によった。

① 単語はつづき書きにした。

② 単語の中、離合動詞は音節の間に「▲」を入れて示した。例えば、

‘打仗 dǎ ▲ zhàng’、‘结婚 jié ▲ hūn’

③ 声調の変化(変調)は、それによらなければならないもの、例えば‘不是 búshi’、また‘好好儿(的) hǎohǎor (de)’など形容詞の重ね方を除き、本来の声調で示してある。‘不’‘一’‘七’‘八’などの後に第4声・本来第4声で軽声になったものがあったとしても変調させていない。

④ 語彙によっては親文字の発音と異なるものがある。方言や俗語に多いが、それらには発音を示すところに「*」印を付してある。例えば、

概楼 *gáilou

⑤ 同じ漢字表記で、品詞が異なり、発音のつづき書き・わかち書きに違いがあるもの、例えば単語に対する連語や、離合動詞に対する名詞などの場合、後の品詞名のあとに()で発音を示した。

⑥ ‘～儿’‘～子’‘～头’を接尾してもしなくてもいいものは、‘～(儿)’‘～(子)’‘～(头)’で示した。このような語が派生語を作り、しかも接尾辞を必要としないものは、省略符号「～」を置き、直接つづけた。

⑦ 儿化音は前音節韻母の変化を示さず、もとのままの音にした。なお、前の音節の韻母がどのように変化するかは、「6. 儿化韻について」を参照されたい。

⑧ 成語・成語形式の語は、わかち書きによって発音を示した。

3) 語の変化形式のものは、原則として語彙としてあげていない。原形語のところに(疊)(AABB式)、(疊)(AliAB式もとる)で示した。擬似変化形式のものは、これに一項を与え、×印を付して、変化形式でないことを示した。例えば、

病病歪歪；×病歪 宗宗件件；×宗件

4) 同義語・反義語の関係が、その語彙全体について成立する場合は、①②…と分けた語釈の前に「=」「↔」の符号をおき、ある部分についてのみ成立する場合には、その語釈の後に「=」「↔」の符号をおき、それぞれの関係を限定した。

5) 方言・書面語・旧白話などの表示は別掲の「符号・略語表」中のもので示したが、語釈①②…全体にわたるものは①の前に、一部にだけ適応されるものには、その箇所に示した。

6) 主として行為名詞についてであるが、做() 搞() とあるものは、「做」+行為名詞「搞」+行為名詞」という結び付きができることを示している。

7) 形容詞、動詞の中には、それ自身で独立して述語にならないが、それぞれ修飾機能をもったり、客語をとったりするものがある。これらは形容詞・動詞として完全なものでないで、不完という略語をつけて注意をうながしておいた。また、名詞の中にも、それ自身で独立して用いることができず、修飾語を必要とするものがあり、このような語にも不完という略語を付してある。

8) Aという単語がBと同音・同義で、Cとも同義語の関係にある場合には、「A=B/C」という示しかたをした。

9) 主に名詞についてであるが、文の中で副詞的修飾語(状況語)になれるものは、副・修として、その機能を示した。

10) 単語として成立していても、独立して用いられず、あるいは極めて制限された範囲で他の語と結ぶものがある。それらについては、あるいは語釈の後に簡単に注記しておいた。

11) 方言は、多くの地域の方言を採用したが、通用地域を確認し、その地域を特定できるものについてのみ地域表示を行い、おおよその地域や範囲を示すにとどめた。

12) 語釈の記述については次の点に注意されたい。

① 品詞を分けてあるが、日本語の対応語がそれに一致しないものがある。このずれはいたしかたのないものであるが、日本語が動詞・動詞的になっているから、あるいは形容詞・形容詞的になっているから、動詞・形容詞という考え方をしてはいけない。

② 形容詞の対応語は、そのまま日本語の形容詞をあてられないものは、「…である」「…だ」という対応語をあてている。これは中国語では一般に形容詞は述語性をもつから、こうしておいた方が不完全形容詞との間に混乱が起きないと考えたからである。

③ 対応語中、ある意味を限定するため、あるいは関連性を表すため、冒頭に()をつけて限定・関連をあたえ、次に対応語を記している。この場合、対応語をコンマで切っているものは、()の記述がコンマ以下の対応語にも及ぶことを表す。例えば、

哑场 yǎ ▲ chǎng [動](ある場で) だれも発言しない、おしまる。

「(ある場で)」は後に続く二つの対応語にかかる。

④ 語釈中、対応語の後で意味を補充したり、限定したり、用法上の説明を加えたりしている場合には「；」で切っている。

⑤ 対応語はできるだけ多くし、意味の範囲をカバーできるようにしたが、例文で訳出してそれに代えているものも少なくない。とくに広義の日中同

形語の一部ではそのような方法をとっている。

- ⑥ 虚詞の説明、とくに日本語訳は例文をはなれては成立しないものが少なくないので、例文を豊かにして、日本語との微妙な対応を会得してもらうようにした。
- 13) 専門用語の動・植物名で、学名と一致しないものは、俗称の方をとっている。
- 14) 語構成上の一部が見出し語として掲げである場合には、派生語を省略符号「～」で示し、その内部に「[～] [～]」という形でまとめ、アルファベット順に排列し、その例文には例という略語を付した。加えて、同上の派生語の後に置かれる「[一] [一]」は、その派生語がさらに他の語を構成していることを示す。
- 15) 例文は現代中国語から旧白話・文言の順に排列を行っている。漢字表記は原則として簡体字を用いているが、近代や旧白話の例では‘那’で‘哪’を、‘他’で‘她’‘它’を、また‘甚’で‘什’を、‘的’で‘得’‘地’を表すものなどがあり、必ずしもすべて現代語表記によっているわけではない。
- 16) 成語と一部諺、例文では旧白話・文言、また魯迅の例に繁体字を用いた出典表記を行っている。略称を用いたものも多くあるため、「主要出典一覧」によって確かめられたい。

5 品詞名について

- 1) 品詞名は次のような略語を用いた。
- 〔名〕名詞 〔動〕動詞 〔助動〕助動詞・能願動詞
- 〔形〕形容詞 〔数〕数詞 〔量〕量詞・助数詞
- 〔数量〕数量詞 〔代〕代詞 〔副〕副詞
- 〔接〕接統詞・連詞 〔助〕助詞（語気・時態・構造助詞）
- 〔介〕介詞 〔接尾〕接尾辞 〔接頭〕接頭辞
- 〔擬〕擬態語・擬声語 〔間〕間投詞・感嘆詞
- 〔応〕挨拶語・応対語

この中、特に数量詞を設けたのは、‘一派’‘一片（平野）’などは、‘一’以外とは結ばないので、一語と認定しなければならないからである。〔接尾〕の中には一般文法書で方向動詞としているもの、可能不可能あるいは程度を表す‘-不了’‘-得很’などを含む。

- 2) 品詞の認定は1950年代の品詞論争の成果を慎重に検討して、その基礎の上に行った。ただ、文言から口語あるいは白話文、現代書面語に入ったものについては、機能の面からのみ認定を行っている。

- 3) 主語・述語・客語・補語などの文法用語を用いているが、これらについては一般中国語法書が説くものと同じ概念をもつものと解してよい。

6 儿化韻について

接尾語「～儿」は、その前の韻母と結びついて一つの音節を構成するが、その場合、音変化を伴うものが多い。‘拼音字母’による表示では、もとの音節に「～r」をそえるだけであるが、音変化を考慮して注音するときは、次のような表記も行われている。

- 1) ‘～r’をつけ加えるもの。
- a fǎr (法儿) fǎr
-o cuòr (错儿) cuòr
-e gēr (哥儿) gēr
-u tūr (兔儿) tūr
-ng dōngr (东儿) dōngr
- 2) 最後の母音や子音を取り去って‘～r’を加えるもの。
- ai gǎir (盖儿) gǎir
-ei wèir (味儿) wèir
-an biānr (边儿) biānr
-en fēnr (分儿) fēnr
- 3) ‘～er’をつけ加えるもの。
- i jìr (鸡儿) jīer
-ü yúr (鱼儿) yúer
- 4) 最後の子音を取り去って‘～er’を加えるもの。
- in xìnr (信儿) xièr
- 5) zhi, chi, shi, ri, zi, ci, si は‘i’が‘～er’に変わる。
- shìr (事儿) shèr

符号・略語表

- 〔名〕：名詞
〔動〕：動詞
〔助動〕：助動詞・能願動詞
〔形〕：形容詞
〔数〕：数詞
〔量〕：量詞・助数詞
〔数量〕：数量詞
〔代〕：代詞
〔副〕：副詞
〔介〕：介詞
〔接〕：接統詞・連詞
〔助〕：助詞（語気・時態・構造助詞）
〔接頭〕：接頭辞
〔接尾〕：接尾辞

〔間〕：間投詞・感嘆詞
 〔擬〕：擬態語・擬声語
 〔応〕：挨拶語・応対語
 〔連〕：連語
 〔熟〕：熟語・慣用語
 〔成〕：成語・成語形式の語
 〔諺〕：諺語・ことわざ
 〔歇〕：歇後語（しゃれことば）

㉑：書面語・文言語
 ㉒：方言
 ㉓：旧白話語彙
 ㉔：旧社会の用語
 ㉕：敬語
 ㉖：謙讓語
 ㉗：書簡文用語

㉘：北方語
 ㉙：北京語
 ㉚：南方語
 ㉛：吳語
 ㉜：広東語
 ㉝：東北方言
 ㉞：遼寧方言
 ㉟：内モンゴル方言
 ㊱：西北方言
 ㊲：山東方言
 ㊳：西南方言
 ㊴：河北方言
 ㊵：河南方言
 ㊶：天津方言
 ㊷：四川方言
 ㊸：陝西方言
 ㊹：湖南方言
 ㊺：山西方言
 ㊻：浙江方言
 ㊼：紹興方言
 ㊽：江蘇方言
 ㊾：蘇北方言
 ㊿：安徽方言
 ㊽：江西方言
 ㊾：福建方言
 ㊿：貴州方言
 ㊽：広西方言
 ㊾：雲南方言
 ㊿：江南方言

㊽：維族語（ウイグル語）
 ㊾：壮族語（チワン語）
 ㊿：チベット語

㊽：モンゴル語

㊽：婉曲的用法

㊽：褒義

㊽：貶義

㊽：音訳語

㊽：略語

㊽：転義・比喻

㊽：罵語（ののしり言葉）

㊽：転義・比喻（㊽との使い分けについては、凡例3「親文字について」の11)を見よ）

㊽：公文書用語

（疊）：疊語（形容詞の AABB 式変化形式）

《疊》：疊語（形容詞の AliAB 式変化形式）

㊽：不完全形容詞・動詞・名詞

副・修：副詞性修飾語（状況語・状語）になれるもの

形・修：形容詞性修飾語（限定語・定语）になれるもの

倣～：「倣」＋行為名詞」の形をとれるもの

搞～：「搞」＋行為名詞」の形をとれるもの

前項：前項を見よ

次項：次項を見よ

字解：親文字の解説を見よ

語彙：語彙の項を見よ

別項：別項参照

㊽：特に注意を要する付記

例：派生語の例文であることを示す

（又）：又音（…とも発音される）

（旧）：旧音（もと…とも発音された）

〈医〉：医学

〈印〉：印刷

〈園芸〉：園芸

〈音〉：音楽・楽器

〈化〉：化学・化学工業

〈貝〉：貝類

〈海〉：海洋・航海

〈機〉：機械工学

〈気〉：気象

〈漁〉：漁業

〈教〉：教育

〈空〉：航空

〈軍〉：軍事

〈経〉：経済

〈劇〉：演劇・映画

〈建〉：建築・土木

〈語〉：言語・言語学・中国語学

〈交〉：交通・鉄道・運輸

〈鉦〉：鉦物・鉦業

〈昆〉：昆虫

〈魚〉：魚類

〈算〉：電算機
 〈宗〉：宗教
 〈商〉：商業
 〈食〉：食品
 〈心〉：心理学
 〈水〉：水利
 〈数〉：数学
 〈生〉：生理・生態
 〈石〉：石油
 〈船〉：造船
 〈体〉：体育
 〈地〉：地質・地理・測量
 〈鑄〉：鑄造
 〈中医〉：中国医学
 〈中薬〉：中国医薬
 〈通〉：通信・無線・電信・電話
 〈哲〉：哲学
 〈天〉：天文
 〈電〉：電機工学
 〈土〉：土壌
 〈動〉：動物
 〈植〉：植物
 〈鳥〉：鳥類
 〈農〉：農業・害虫・農薬
 〈美〉：美学・美術
 〈物〉：物理
 〈文〉：文学
 〈法〉：法律
 〈貿〉：貿易
 〈紡〉：紡績・織物
 〈牧〉：牧畜
 〈冶〉：冶金
 〈業〉：業学
 〈林〉：林業
 〈論〉：論理学

＝：…とも表記される、また同義語を示す

☞：参照せよ

↔：反義語を示す

//：以下参照頁であることを示す

/：凡例4「語彙について」の8)を参照

*：俗字を示すとともに、見出し語彙の発音につけられた場合は親文字の発音と異なることを、また(〜ル)(〜頭)のあとに付したものは語彙としても一項を立てていることを示す

< >：中国語の例文を示す

[]：語釈中に用いられた中国語の訳文または説明を示す

[]：凡例2「親文字・語彙を検出する方法」の2)③を参照

～：中国語の省略符号

一：派生語の派生語であることを示す省略符号

——：1) 歇後語の後文を導く、2) 会話文中において、話し手が変わることを表す

《 》：書名であることを示す

▲：発音の箇所付し、離合動詞であることを示す

△：異体字の左上に付し、この異体字がほかの箇所で親文字として用いられていることを示す

(《 》)：出典を示す

×：AABB 式の見出し語に用いて、この語がA B 式の変化形式でないことを示す

日語：日本語から入ったことを示す

俗語：口語語彙であることを示す

主要出典一覧

《魯》；魯迅全集
 彷徨一彷徨
 呐喊一呐喊
 故一故事新編
 (題名については第一字目の漢字を挙げる。例えば《魯・呐喊・孔》は《魯迅全集・呐喊・孔乙己》の略)
 《負曝》；負曝閑談
 《老殘》；老殘遊記
 《老殘二集》；老殘遊記・二集
 《二十年》；二十年目睹之怪現狀
 《官場》；官場現形記
 《海上花》；海上花列傳
 《三俠》；三俠五義
 《咀華》；正音咀華
 《品花寶鑑》
 《兒女》；兒女英雄傳
 《紅樓夢》
 《儒林》；儒林外史
 《姻緣》；醒世姻緣傳
 《照世盃》
 《十二樓》
 《今古》；今古奇觀
 《二拍》；二刻拍案驚奇
 《初拍》；初刻拍案驚奇
 《醒世》；醒世恒言
 《警世》；警世通言
 《古今》；古今小說
 《金瓶梅》；金瓶梅詞話
 《西遊》；西遊記
 《水滸》；水滸全傳
 《三國》；三國演義
 《元曲》；元曲選
 《元曲外》；元曲選外編

(《大作家關漢卿傑作戲曲集》を含む)

《王西廂》 ; 王實甫西廂記

《清平》 ; 清平山堂話本

柳耆卿 一柳耆卿詩酒玩江樓記

簡貼 一簡貼和尚

西湖 一西湖三塔記

合同 一合同文字記

風月瑞仙亭

藍橋記

快嘴 一快嘴李翠蓮記

洛陽 一洛陽三怪記

風月相思

張子房 一張子房慕道記

陰鷺 一陰鷺積善

陳巡檢 一陳巡檢梅嶺失妻記

五戒禪師 一五戒禪師私紅蓮記

刎頸 一刎頸鴛鴦會

楊溫 一楊溫攔路虎傳

《雨窗欹枕記》 ; 花燈轎蓮一花燈轎蓮女成佛記

曹伯明 一曹伯明錯勘賊記

錯認屍

董永 一董永遇仙傳

戒指兒記

羊角哀 一羊角哀死戰荊軻

死生交 一死生交範張鷟

老馮唐 一老馮唐直諫漢武帝

漢李廣 一漢李廣世號飛將軍

夔關 一夔關姚下吊諸葛

雪川 一雪川肖琛貶霸王

李元 一李元吳江救朱蛇

《京本》 ; 京本通俗小說

《董西廂》 ; 董解元西廂記

《劉知遠》 ; 劉知遠諸宮調

《宣和》 ; 大宋宣和遺事

《新編五代》 ; 新編五代史平話

《變文》 ; 敦煌變文集

伍子胥 一伍子胥變文

孟姜女 一孟姜女變文

漢將 一漢將王陵變

捉季布 一捉季布傳文

李陵 一李陵變文

王昭君 一王昭君變文

董永 一董永變文

張義潮 一張義潮變文

張淮深 一張淮深變文

舜子 一舜子變

韓朋 一韓朋賦

秋胡 一秋胡變文

前漢 一前漢劉家太子傳

嶺山 一嶺山遠公話

韓擒虎 一韓擒虎話本

唐太宗 一唐太宗入冥記

葉淨能 一葉淨能詩

孔子 一孔子項託相問書

晏子 一晏子賦

鷺子 一鷺子賦

茶酒 一茶酒論

下女夫 一下女夫詞

成道經 一太子成道經

成道變文 一太子成道變文

八相變

破魔 一破魔變文

降魔 一降魔變文

難陀 一難陀出家緣起

祇園 一祇園因由記

長興 一長興四年中興殿應聖節講經文

金剛 一金剛般若波羅蜜經講文

阿彌陀 一佛說阿彌陀經講經文

妙法 一妙法蓮華經講經文

維摩詰 一維摩詰經講經文

觀彌勒 一佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經講經文

無常經 一無常經講經文

父母 一父母恩重經講經文

目連緣起

大目乾連 一大目乾連冥間救母變文并圖一卷并序

目連變文

地獄 一地獄變文

頻婆娑羅王 一頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變

歡喜 一歡喜國王緣

醜女緣起

秋吟 一秋吟一本

不知名 一不知名變文

八相押座文

三身 一三身押座文

維摩經 一維摩經押座文

溫室經 一溫室經講唱押座文

故圓鑑 一故圓鑑大師二十四孝押座文

左街 一左街僧錄大師壓座文

押座文

季布詩詠

蘇武 一蘇武李陵執別詞

百鳥名

四獸 一四獸因緣

斷齋書

搜神記

孝子傳	《古小說鉤沈》；青史子
《世說新語》	語林
《唐宋傳奇集》；古鏡—古鏡記	郭子
白猿—補江總白猿記	笑林
離魂—離魂記	俗說
枕中—枕中記	小說
任氏—任氏傳	水飾
古銘—編次鄭欽悅辨大同古銘論	列異傳
柳氏—柳氏傳	古異傳
柳毅—柳毅傳	甄異傳
章武—李章武傳	述異記
小玉—霍小玉傳	靈鬼志
古嶽—古嶽瀆經	祖臺之志怪
南柯—南柯太守傳	孔氏志怪
馮媼—廬江馮媼傳	神怪錄
小娥—謝小娥傳	神錄
李娃—李娃傳	齊諧記
三夢—三夢記	幽明錄
長恨—長恨傳	鬼神列傳
老父—東城老父傳	志怪錄
升平—開元升平源	集靈記
鶯鶯—鶯鶯傳	漢武故事
周秦—周秦行記	妒記
湘中—湘中怨辭	異聞記
異夢—異夢錄	玄中記
秦夢—秦夢記	異林
無雙—無雙傳	曹毗志怪
上清—上清傳	集異記
楊娼—楊娼傳	神異記
飛烟—飛烟傳	續異記
虬髯—虬髯客傳	錄異傳
冥音—冥音錄	雜鬼神志怪
夜怪—東陽夜怪錄	祥異記
靈應—靈應傳	宣驗記
隋遺·上一隋遺錄卷上	冥祥記
隋遺·下一隋遺錄卷下	旌異記
海山·上一隋煬帝海山記上	
海山·下一隋煬帝海山記下	
迷樓—迷樓記	
開河—開河記	
綠珠—綠珠傳	
太真·上一楊太真外傳上	
太真·下一楊太真外傳下	
流紅—流紅記	
飛燕—趙飛燕別傳	
意歌—譚意歌傳	
幼玉—王幼玉記	
王樹—王樹傳	
梅妃—梅妃傳	
師師—李師師外傳	

編纂者・協力者（順不同）

1. 編纂委員会

（*は故人）

編集主幹：香坂順一

委員：大原信一	芝田 稔	*萩尾長一郎	*鈴木直治	*井上隆一
伊地智善継	宮田 一郎	服部昌之	原田種成	上野恵司
竹島金吾				

2. 校閲担当：閻 崇 璩

3. 編纂室

室 長：渡辺功一	佐藤邦宏			
室 員：大島吉郎	永吉昭一郎	山田真一	植松希久磨	浅井澄民
財木美樹	布川雅英	小松弓子	清水頼子	那須雅之
海老根盛雄	小原京子			
編纂協力者：何 建 章	楊 天 戈	姜 林 森	陳 慶 煌	汪 玉 林
孟 克	于 日 平	鮑 顯 陽	孔 令 敬	田 秀 芳
施 一 昕	許 英 淑	陶 振 孝	李 輝	王 紹 新
閻 紅 生	平松圭子	荒屋 勸	高橋弥守彦	中村浩一
*上條紀昭	瀬戸口律子	岡部謙治	寺村政男	大石敏之
川 俣 優	大塚秀明	喜多山幸子	鈴木勝則	竹島 毅

4. 資料提供・釈義・校正協力者

（1）日本側協力者

宮森常子	尾崎 實	内田慶市	石島扶美代	大内田三郎	岡崎邦彦
林 修三	藤江在史	渡辺昭夫	白井啓介	唐沢理津子	前田和子
森田華子	西村加代	石橋三千代	滝井満子	林 令子	神田章代
野田知子	西川和男	原瀬ふみ子	三坂希一	平松正子	荒川清秀
原瀬隆司	水元日子	竹内 誠	岩本真理	小野塚澄子	鶴島俊一郎
蘆立一郎	上野 肇	植田 均	川島郁夫	許田倉園	桜井幸江
児玉玲二	地藏堂貞二	中澤達男	松田郁子	堀富茂子	米村美智子
岩田礼子	井波律子	岡崎郁子	中山景子	臼田真佐子	鈴木 誠
井波陵一	戸沼市子	佐々木律子	中山めぐみ	宇城元子	角田睦子
原田文子	黒江敏男	吉村 寛	鬼塚正季	鈴木昌子	山崎ヨシ子
神子貴司	平井和之	稲葉昭二	伊藤美重子	武永尚子	福地滋子
市毛孝典	仁科糸恵	前田大度	高島俊男	鈴木常勝	北村亮介

（2）中国側協力者

丁 秀 山	恒 紹 榮	荀 春 生	陳 可 森	王 文 虎	張 亞 軍
郭 承 敏	龍 潜 庵	陳 剛	張 庸 吾	楊 中 强	沙 健
凌 大 波	武 雲 霞	鄭 崇 謨	呂 才 楨	戴 惠 本	賈 永 券

許 玉 增	喬 傳 經	鹿 琮 世	李 培 元	馬 欣 華	滿 漢 英
玄 宜 青	李 丹	田 善 繼	蔣 士 珍	白 玉 崑	黃 文 哲
李 中	陸 培 春	胡 竹 安	許 宝 華	吳 士 英	孫 建
王 磊	文 若 雅	周 家 筠	湯 珍 珠	錢 乃 榮	張 一 舟
徐 宗 才	于 承 武	吳 坤 定	沃 守 信		

(3) 編集事務局

井上富士子	衛 藤 和 子	大 塚 敦 子	尾 身 陽 子	押 川 雄 孝	押 川 美 代 子
亀倉加久子	芝 義 子	田 端 さ や か	新 倉 洋 子	花 崎 幸 雄	永 上 正
山岸はるみ	東 映 全	王 雪	王 建 成	欧 孝 明	張 淑 媛
張 志 凡	陳 白 逸	程 建 煒			

中国語大辞典

大東文化大学中国語大辞典編纂室編

主 幹
香 坂 順 一

角川書店

目 次

刊行にあたって	(1)
凡 例	(7)
編纂者・協力者一覧	(15)
部首検字表	(18)
部首索引	(20)
本 文	1
付 録	
I 度量衡一覧表	4192
II 中国の親族呼称	4194
III 中国少数民族表	4196
IV 節気表	4198
V 名詞量詞組合せ一覧	4199
VI 新訂正音表	4206
VII 化学元素表	4208
VIII 簡体字表（日中字形対照表）	4209
IX 漢字偏旁名称表	4219